教育みかわ

第139号

会長挨拶
三河教育研究会役員
学校自慢（新城支部）
支部トピックス（岡崎支部）
教室の窓から（西尾支部）
研究校紹介（豊橋支部）
定期総会　報告
定期総会　教育講演会
本部事業
教育随想

三河教育研究会

令和５年７月10日

会長挨拶

思いを受け止め、対話を重ねる

三河教育研究会　会長　鈴木佳樹

若葉から青葉へ、子どもたちの笑顔がよりいっそう輝く季節のなか、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、令和五年度三河教育研究会総会並びに教育講演会を盛会裏に終えることができました。心より感謝申しあげます。

▼コロナ禍三年間の知恵と工夫を生かす

五月八日から、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが五類に移行しました。各学校の教育活動には今、コロナ禍三年間の知恵と工夫を生かした、ポストコロナにおけるニューノーマルが求められています。

▼「当たり前」「普通」を丁寧に見直す

四月五日、入学・始業式前日のこと。私はマスクを外し、入学式準備のために登校してくる六年生を正門で出迎えていました。いつものように、特別支援学級の男の子とお母さんに声をかけたところ、お母さんから「どちらさんですか」と返され、言葉を失いました。耳の不自由な方ではありますが、三年間、毎日、あいさつを交わしてきた関係です。その翌日、子ども見守り隊の方からは、「声からすると校長先生だと思うけど間違いないかね」と声をかけられました。

マスクを外して、私は本来の自分になったつもりでいましたが、保護者や地域、子どもたちにとっては、三年前に着任した、マスクをしている私が本来の私なのだと気づきました。

ポストコロナにあって、「当たり前」や「普通」について、よりいっそう丁寧に見直していく必要性を強く感じた出来事でした。

▼子どもの今をまるごと受け止める

激動の時代をたおやかに生き抜き、戦後現代詩の長女と呼ばれた西尾市ゆかりの詩人・茨木のり子さんが、詩『聴く力』の最終連でこう述べています。

だが
どうして言葉たり得よう
他のものを　じっと
受けとめる力がなければ

茨木のり子さんは、「話す」ことより、まずは「聴く」こと、「主張する」ことより、まずは「受け止める」こと、と述べています。凛としたまっすぐな言葉が心に響きます。

「まずは受け止める」という考え方は、脈々と受け継がれてきた三河教育の姿勢「はじめに子どもありき」と重なります。いつの時代にあっても、子どもの今をまるごと受け止めることが大切なのです。そして、しっかりとした言葉で、対話を重ねることこそが求められているのではないでしょうか。

▼三河教育研究会の組織の力を高める

組織の力の高さはコミュニケーションの量に比例します。三河教育研究会においては、会員相互の思いを受け止め、対話を重ねることで、教師の地道な営みを支えていきたいと考えています。

本会の目的「会員相互の研究を深め、小・中学校教育の推進をはかること」に資するためには、各支部、各部会・委員会、各学校の研修が極めて重要です。それぞれの研修で得られた知見や課題を、丁寧な情報共有を通して受け止め、十九万人余の三河の子どもたちの健やかな成長を支える一助としてまいります。

また、三河の子どもたちのための教材「愛知教育文化振興会刊行物」編集には、四百七十六人の会員が尽力されています。刊行物の魅力や編集にかける熱い思いを受け止めることで、三河の子どもたちのための、三河の先生方のための刊行物を目指します。

そして、授業力養成講座は、授業力向上を願う仲間の熱い思いを提案授業や研究協議を通して受け止め、切磋琢磨できるよい機会です。本年度は、豊川市、知立市、安城市で開催します。積極的にご参加ください。

▼むすびに

最後になりましたが、本年度も、三河のすべての子どもに、三河の教師の手による優れた教育を保障したいという三河教育研究会設立理念の具現化に向けて、一万二千人余の会員とともに確かな歩みを進めてまいります。

関係諸機関の皆様方、諸先輩方には、いっそうのご指導とご支援を賜りますようお願い申しあげます。

令和五年度
三河教育研究会役員

会長　安城桜井小　鈴木佳樹
副会長　西尾東部中　石川雅春
北設東栄小　後藤理恵
顧問　岡崎葵中　柴田昌一
北設東栄中　夏目貴司
田原田原中　平井敦
会計監査　豊橋汐田小中　神和也
豊田逢妻中　吉野薫
幹事　みよし三好中　吉田祐示
豊橋八町小　山本武志
豊川牛久保小　小澤慎一
豊田末野原中　平井千夏
愛教大附属岡崎小　大槻真哉
愛教大附属岡崎中　手島英樹
愛教大附属特別支援　鈴木則明
庶務　愛教大附属岡崎小　廣川幸平
愛教大附属岡崎中　村上智彦
愛教大附属特別支援　川合陽介
会計　蒲郡蒲郡南部小　遠山祐幸
西尾幡豆小　中村賢司
愛教大附属岡崎中　岩脇芳弘

◆評議員

（部会長）

国語　高浜南中　清水美智男
社会　豊橋松葉小　松河由美子
算数数学　岡崎岡崎小　鈴木勝久
理科　知立知立南中　福井信也
生活科　豊橋豊小　稲田あけみ
音楽　岡崎六ツ美西部小　寺島真澄
造形　岡崎美川中　安藤眞樹
保健体育　岡崎六ツ美中　伊澤勉
技術・家庭　岡崎梅園小　近藤文彦
英語（外国語活動）　豊川一宮中　井上敏宏
道徳　岡崎矢作西小　清水良隆
特別活動　岡崎常磐小　富田好己
特別支援教育　新城八名小　河部拓
養護教諭　刈谷双葉小　土井淳
総合的な学習　安城志貴小　宮田美智子

（各種研究委員会）

学習情報　豊川御津中　白井博成
学校図書館　西尾八ツ面小　今本政勝
統計教育　安城三河安城小　濱田孝之
生徒指導　豊田小原中　後藤誠二
へき地教育　北設田峯小　村松敦雄

（支部長）

豊橋植田小　近藤久弥
豊川音羽中　杉浦滝三
蒲郡大塚中　多田敦
新城鳳来寺小　原田耕三
田原野田小　本多潤一
北設東栄小　後藤理恵
岡崎矢作西小　清水良隆
碧南鷲塚小　原田朋浩
刈谷小垣江小　服部孝司
豊田朝日丘中　杉山雅洋

◆常任委員

安城　安城南部小　杉浦和明
西尾　寺津中　村松千里
知立　知立中　淵上隆博
高浜　高取小　中井滋
みよし　南中　宮田安弘
幸田　南部中　鈴木一也

総務委員会
委員長　岡崎葵中　柴田昌一
副委員長　愛教大附属岡崎中　手島英樹
委員　安城安城北部小　加藤雅亮
西尾吉田小　加藤純子
豊川小坂井西小　中村美香
愛教大附属岡崎中　村上智彦
愛教大附属岡崎中　岩脇芳弘

広報委員会
委員長　北設東栄中　夏目貴司
副委員長　愛教大附属特別支援　鈴木則明
委員　蒲郡蒲郡北部小　大須賀繁弥
岡崎額田中　鈴木孝広
幸田中央小　小野良琢也
愛教大附属特別支援　川合陽介
愛教大附属特別支援　鈴木哲也

調査委員会
委員長　西尾東部中　石川雅春
副委員長　北設東栄小　後藤理恵
愛教大附属岡崎小　大槻真哉
委員　豊田敷島小　藤谷公寿
豊橋玉川小　藤原幸代
刈谷衣浦小　児玉竜二
愛教大附属岡崎小　廣川幸平
愛教大附属岡崎小　稲垣修一

学校自慢

キャラクターと自然に囲まれた学校で

新城市立鳳来寺小学校

「ぼくはコノハマン。学校のみんなのことをいつも見ているよ。」

入学式に、本校のキャラクターに扮した六年生の歓迎のことばの一部です。

鳳来寺小学校は、旧鳳来寺小、海老小、連谷小、鳳来西小の四校が統合して、平成二十八年に開校しました。コノハマンをはじめ、海老のシュリンプ捜査官、四谷のセンマイダーなど、地区ごとの特色を模したキャラクターがおり、様々な行事に登場しています。本校では、このキャラクターたちに負けずとも劣らない、特色ある教育活動を行っています。

まずは、教科担任制の推進です。本年度、算数、体育、理科、社会、外国語は、その教科を専門とする教員が担当し、楽しくわかりやすい授業を行っています。

二つ目は、英語教育の充実です。外部講師による英語活動が一年生から行われており、楽しみながら英語に慣れ親しんでいます。

三つ目は、充実した放課後活動です。月・木曜日を中心に、ダンスやスケートボード、お茶教室等、地域講師による様々な分野の講座が開かれています。児童だけでなく、保護者や地域住民も、自分の好きな講座に参加し、活動しています。

また、ムササビが棲む学校林「ム～ちゃんの森」も自慢の一つです。ここでは、キャンプや自然散策を行うことができ、学習に遊びに大いに活用されています。五月には、ムササビをイメージしたこの森のキャラクターが新登場しました。

このような自然に囲まれた環境の中での教育活動を通して、児童はのびのびと楽しく学んでいます。

（文責・松本　和也）

キャラクター大集合の入学式

「支部トピックス」

温かく多様性を認める関わり 校内フリースクール「F組」

岡崎市立六ツ美北中学校

岡崎市では、子供たちの「社会的自立」を目指し、一人一人に寄り添った支援を行っていくため、令和二年度より校内フリースクール「F組」の開設が始まりました。そして、令和五年度には、市内全中学校に開設されました。

本校でも、令和三年度に「F組」を開設しました。学校、学級が子供たちの「居場所」となるために、「学校が子供に適応する」「多様性を認める」「温かく迎える」というF組の理念のもと、「絆づくり」の充実を図っています。

F組の子供たちの中には、学習が少し苦手でも、得意なことには集中して取り組んでいる姿があります。だからこそ、我々教員が、多様な子供たちの個性を受け入れ、寄り添い、子供の可能性を伸ばしていくことが必要だと考えています。

学校や学級に足が向かなくなった子供たちは、F組で生活していく中で、「私を認めてくれる」という自己存在感を高められる機会を多く得ながら、小さな成功体験を積み重ねています。そして、心のエネルギーを蓄え、学校での居場所を見つけ始めています。

F組は、学校や学級に困り感を抱え、足が向かない子供たちの居場所だけではなく、我々教員が、今どのように子供に向き合うべきかを教えてくれる場所にもなっています。様々な活動を通して子供たちの成長を見守る中で、私たち教師もF組の子供たちから、「受け入れ、包み込む」ことがいかに重要かということを学んでいるのです。

（文責・黒柳　公貴）

F組での日常の様子

教室の窓から

三世代の語らいの場「学校茶園」

西尾市立津平小学校

「よかった。今年こそ、普通にお茶摘みができる！」「おじいちゃんも久しぶりに参加したいって、言ってたよ。」

四月初旬、過去三年間、中止や短縮などで制限された行事「親子ふれあい茶摘み」の案内を目にした子供たちの、ようやく全校で思いきり摘めると知った喜びの声です。

津平小学校は西尾市南東部（吉良町）の山あいに位置する学校で、校区に広がる茶畑では、主に「吉良茶」が生産されています。本校は、全校児童百三十七名の小規模校で、周囲を竹林などに囲まれた標高三十二メートルの小高い丘の上にあります。東側斜面には、昭和三十一年に植えられた茶畑（約十アール）が広がり、調べてみると、昭和二十八年に校舎北の畑に、当時の六年生がお茶の木を植えたことが始まりだとわかりました。戦後、貧しい子供たちを思う地域の方々が、弁当の時間にお茶を提供することで、少しでも学校が楽しくなるようにと願い、協力してくださったそうです。

現在では、三年生が総合的な学習の時間の一環として、学校茶園の世話をしています。子供たちは、茶園農家の方のアドバイスを受け、肥料まきや草取り、寒冷紗がけなどを行います。そして、いよいよ茶摘みシーズン。三年生が育て、新芽をつけた茶葉をＰＴＡ主催行事「親子ふれあい茶摘み」で摘み取ります。この行事は、今年で六十七年目を迎えた伝統行事です。茶摘みの日、学校茶園には親子だけでなく、祖父母も多く参加し、五月の風に吹かれ心地よい汗をかきながら三世代で語らう姿が見られました。

今後も、地域の温もりをいただきながら、特色ある学校づくりを進めてまいります。

（文責・浅岡　秀雄）

親子ふれあい茶摘みの様子

研究校紹介

自らかかわり、自己の見方・考え方を深める羽根井っ子の育成

～ＩＣＴ機器の特性を活かした「羽根井モデル」の実践を通して～

豊橋市立羽根井小学校

本校は豊橋駅西側に位置する児童数四百八名の地域の方々に愛される伝統ある学校です。昨年度、創立九十周年を迎えました。

令和三年度から、豊橋市教育委員会及び豊橋市立小中学校現職研修委員から委嘱を受け、ＩＣＴを有効活用した問題解決的な学習について研究を進めています。

一　主題設定

ＧＩＧＡスクール構想により、高速大容量のネットワーク環境が整備され、子ども一人一人に一台ずつ端末が貸与されました。これらを活用した多様な学習活動の実現は、子どもの思考・判断・表現の力を伸ばし、主体的に学ぶ態度の育成につなげることができます。そこで、「自らかかわり、自己の見方・考え方を深める羽根井っ子の育成」を目指し、ＩＣＴ活用を取り入れた問題解決的な学習の実践を積み重ねてまいりました。

二　目指す子ども像と研究の概要

目指す子ども像を「すすんで物事とかかわり合いながら、新しい考えを知る楽しさを感じ、学び続けられる子」とし、それに迫るために、「学びの土台となる親和的な雰囲気の学習環境づくり」、「問題解決的な単元構想の作成」「ＩＣＴ機器の活用の工夫」に取り組んできました。具体的には、「お話タイム」や「つながりタイム（ＳＳＴ等）」の実施、ＩＣＴ活用とその効果をまとめた「羽根井モデル」をよりどころとした単元構想の作成などです。

十月十八日には、研究発表会を行います。多くの方にご参観いただき、ご指導をいただければ幸いです。

（文責・中村三木也）

パワーポイントでプレゼンを作って意見交流

令和五年度　定期総会　報告

五月十七日（水）蒲郡市民会館

五月十七日（水）、蒲郡市民会館において、令和五年度三河教育研究会定期総会・教育講演会が、会員と来賓の皆様のご臨席を得て、盛大に開催されました。

定期総会の冒頭、本年度の役員が承認され、鈴木佳樹会長を中心とした新体制が発足しました。

鈴木会長は、就任のあいさつの中で、西尾市ゆかりの詩人・茨木のり子さんの詩『聴く力』を引用し、「まずは受け止める」という考え方が、三河教育で脈々と受け継がれてきた「はじめに子どもありき」の姿勢と重なり、いつの時代も目の前の子どもをまるごと受け止めることが大切だと述べられました。

また、組織力の強さは、コミュニケーションの量に比例するとの考えから、本会は、会員の思いを受け止め、対話を進めることで、会員の地道な営みを支えていくべきであり、本会の目的「会員相互の研究を深め、小・中学校教育の推進をはかること」を具現するためには、研修が極めて重要であり、様々な研修で得られた知見や課題を、会員同士が情報共有し、三河の子どもたちの成長を支える一助としていこうと語りかけました。

就任のあいさつに続き、来賓を代表し、愛知県教育委員会委員の岡田豊様、蒲郡市教育委員会教育長の壁谷幹朗様からご祝辞をいただきました。

岡田様からは、ＩＣＴ教育環境が、「令和の日本型学校教育」を支えているとも言えるが、大切なのは目の前の子どもとともにつくり上げる授業であり、子どもの主体的な学びを支援し、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の積み重ねこそが学校教育の根幹を支えていく、という意味で本会が果たすべき役割があるとご示唆いただきました。

壁谷様は、校長として勤めていた蒲郡南部小学校の教諭が、授業力養成講座において授業公開を行った際のことにふれ、三河各地の優れた実践者と助言者により、会員の授業力向上につながる大きな成果を残してきたと、授業力養成講座の価値について述べられました。今後も、中堅教諭のミドルリーダーとしての資質向上を目指す機会になることを期待していると激励のお言葉をいただきました。

ご祝辞の後、前年度の活動にご尽力いただきました前会長の松平貴圭先生、前副会長の中野渡善樹先生に感謝状を贈呈しました。

続いて、令和四年度の事業報告・決算報告、令和五年度の事業計画案・予算案について、すべての議案が賛成多数で承認されました。

当日は、多くの皆様のご協力により、盛会裏に終えることができました。ありがとうございました。

教育講演会

演題「一人ひとりが　みんなたいせつ　～作品に託す願い～」

講師　児童文学作家　くすのき しげのり 氏

今年度の教育講演会では、児童文学作家であるくすのきしげのり様をお招きしました。くすのき様は、実際に五つの作品を朗読し、それぞれの作品に込められた願いをもとに、子どもとの向き合い方やわれわれ会員の生き方についてご示唆いただきました。くすのき様の講演の中で、いくつか印象的な内容を紹介します。

私が作家として大切にしていることは、自由であるということです。いろんな意味の自由がありますが、ものの見方とか考え方、とらえ方が自由であるということが一番大きいです。絵本とか児童文学作品は、子どもだけが読むものではなく、大人も一緒に楽しむことができますし、大人は大人の楽しみ方ができます。

私の作品は、急に魔法使いが出てきて、不思議な力がついたりするというようなことはありません。皆さんが普段接している子どもたちと同じように、日常の出来事の中で揺れ動く心がテーマになっています。そして、作品に合った画家の方々に描いてもらっています。「想像する力」「共感する力」によって、作品の世界は広がっていきます。これが今日のキーワードになります。

学校の教育現場では、本を読むことは、教育の目的があって教材として読むということが多いです。一般の読書として考えた時、知識が増える、文字を覚える、情操が豊かになるなど、いろんな効果がありますが、まずは、楽しむというところで子どもたちと本を出会わせてあげてほしいと思います。また、これは本当に心からのお願いですが、学校の現場でもデジタル化がどんどん進んでいます。だからこそ、子どもが紙の本と出会う環境をつくってあげてほしいと思います。そ

して、紙の本を勧めてあげてほしいと思います。それがなければ、子どもは紙の本を楽しむということなく成長してしまうからです。紙の本を読むということは、本の重さを感じて、紙のにおいを嗅いで、紙の手触りを感じて、五感を使って本を読むということです。ぜひそういう体験をさせてあげてください。

読書に関して言えば、絵本を読むときには、文章を読み解くだけではなく、絵を読み解くことが大切です。それは、想像する力、共感する力を育むからです。

教育現場では、コミュニケーション力をつけることの大切さが言われています。そのときには、思いや考えを伝えることを、コミュニケーション力ととらえられることが多いです。でも、もう一つ、相手の心を察する、慮る、推し量る、思いやるというような力こそ、これから国際社会を生きていく、令和の社会を生きていく子どもたちにつけてあげてほしい力です。この基礎となるのが想像する力や共感する力なのです。

先生方は、キャリアを重ねていけばいくほど、見通しが立つようになります。これは、ベテランになるということで、大事なことです。だからこそ、何か自分が分かっていないことがあるかもしれないという意識を忘れないでください。想像する力、共感する力を働かせるのです。

想像する力や共感する力は、子どもたちだけでなく私たち大人にとっても、ますます大切になってくると思います。

私が大学で教えている時、学生に質問します。「どのような先生になりたいか。」と。すると、「子どもたちに慕われる先生になりたい。」「何でも相談してもらえる先生になりたい。」など学生は言います。これは大事なことですが、もっと大事なことは、子どもたちが「先生、先生。」と言って寄ってくる中で、一人離れている子がいれば、その子のことを一番に考えられる先生になってほしいと学生に言います。いじめのアンケート調査をして、結果がゼロだったらそれでいいのか。その中に何度も書いては消し、書いては消した跡を見つけたら、本当にこの子は大丈夫かなと考えられる先生になってほしいということを言います。こうしたことは、想像する力や共感する力があって、はじめてできることなのです。

今日は、「一人ひとりが　みんなたいせつ～作品に託す願い～」をテーマに、お話をしました。子どもたちが大切ということだけではなく、先生方ご自身も大切ということです。健康もそうです。先生という仕事は大変な仕事ですが、でも、そこで擦り切れてしまわないようにしてください。どうか家庭人としても、ご自身の人生ということを考えながら過ごしていただきたいのです。皆さんの毎日に、皆さんの人生にたくさんの笑顔がありますように。先生方、本当に心から応援しています。頑張ってくださいとは言いません。頑張り過ぎないでくださいね。本日は、ありがとうございました。

令和五年度　本部事業
生きる力を育成する三河教育
～学び合い、学び続ける教員として～

総務委員会

本年度、三河教育研究会（以下三教研と表記）は、創立六十二年目を迎えました。子どもを中心に据え、生きてはたらく資質・能力を育む教育活動を追究し、これまで多くの成果をあげてきました。

国は、今後の教育課程について、「多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する『個別最適な学び』と、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす『協働的な学び』の一体的な充実が図られることが求められる」としています。加えて、一人一台のＩＣＴ端末が行き渡り、生成ＡＩとのかかわり方が話題に上る今、私たちには、これまで三教研が進めてきた「はじめに子どもありき」の授業づくりの継承・深化と、成果の発信が、今まで以上に求められています。

本年度も、三教研の各部会・委員会による魅力と実効性のある研修活動を計画しました。また、教育研究におけるミドルリーダー養成のために、授業力養成講座を引き続き開催します。ぜひ、ご参加いただき、学びを地域や学校に還元していただきたいと思います。

なお、三教研の取り組みや各学校で実践された学習指導案などを広報「教育みかわ」や公式ウェブサイトを通して紹介・共有していきます。会員の皆様からの情報提供をお待ちしています。

三河教育研究会
公式ウェブサイト

国語部会夏季研修会	8／4	新城
国語部会書写実技講習会	7／28	岡崎
愛知県社会科教育研究大会	8／1	岡崎
算数数学部会夏季研修会	8／22	豊田
愛知県小中学校理科教育研究発表会	8／4	蒲郡
愛知県生活科教育研究大会	8／3	豊川
愛知県小中学校音楽教育研究大会	11／1	田原
造形部会夏季研修会	8／2	豊川
保健体育部会夏季研修会	8／4	岡崎
技術・家庭部会夏季研修会	8／4	幸田
愛知県英語教育研究大会	10／20	豊川
全小道研中部地区小学校道徳教育研究会	11／10	安城
特別活動部会夏季研修会	8／4	知立
特別支援教育部会夏季研修会	8／8	幸田
養護教諭部会夏季研修会	8／7	蒲郡
総合的な学習部会夏季研修会	8／1	安城
愛知県生徒指導研究大会	10／5	知多
東海地区学校図書館研究大会	8／8･9	名古屋
学習情報委員会ＩＣＴ活用研究会	8／4	碧南
愛知県学校視聴覚教育研究大会	11／17	豊田
愛知県統計教育研究発表会・講演会	11／17	名古屋
愛知県へき地・複式・小規模学校教育研究大会	10／20	西尾 豊田
授業力養成講座Ⅰ（東三河）	8／23	豊川
授業力養成講座Ⅰ（西三河）	8／24	安城
授業力養成講座Ⅱ（東三河・小学校）	10／6	豊川
授業力養成講座Ⅱ（東三河・中学校）	10／13	豊川
授業力養成講座Ⅱ（西三河・中学校）	10／20	安城
授業力養成講座Ⅱ（西三河・小学校）	11／16	知立
授業力養成講座Ⅱ（西三河・小学校）	11／21	安城

教育随想（93）

『今、大切にしたいこと』

田原市教育委員会
教育長
鈴　木　欽　也

私たちの生活に多大な影響を与えてきた新型コロナウィルス感染症が、ようやく収束しました（この原稿は五月に書いていますので現在の状況はわかりませんが）。この三年間、学校では臨時休業に始まり、様々な活動の中止や縮小を余儀なくされてきました。楽しい給食の時間は黙食となり、マスクを着けたままの生活がすっかり常態化してしまいました。

そんなコロナの呪縛からようやく解放された今、喜びに気持ちが湧き立つはずのところですが、なかなかそうした思いに至りません。コロナは去っても、それ以外にもあまりに多くの困難な課題を抱えている現状があるためです。

以前から多かった不登校児童生徒の数は、この三年の間に、さらに増加してしまいました。登校できている子供についても、小中高生の六割超が「勉強しようという気持ちがわかない」という調査結果（東大などの調査）が出ています。学びの改革を進めている現在において、たいへん厳しい結果です。学校の働き方改革は、なかなか思うように進まず、学校現場の努力だけでは限界にきているように感じます。また、中学校の部活動を地域に移行させることについても、課題が多すぎて着地の仕方がなかなか定まってきません。この取り組みは、中学生の生活そのものを大きく変えるという意味においては、戦後最大級の大変革であると考えます。国をはじめすべての関係者が大きな覚悟を持って進めていく必要があると思っています。

こうした問題を抱えつつ、学校が取り組むべき課題は目白押しです。個別最適な学びや協働的な学びを具現するための授業改善、ＩＣＴ教育や外国語教育の推進、特別支援教育の充実等々。さらには、こうした教育を推進していくための教員自身の力量向上が求められています。

このような状況の中で、この頃思いを強くしていることがあります。

「日常の活動や時間を大切にしたい」ということであります。

新型コロナウィルスは、私たちに「日常の生活や活動が普通にできること」がいかに尊いことであるかということを教えてくれました。三年前、臨時休業になった時、子供たちが登校し、学校生活が送れるというあたりまえのことが、なんと大切なことであるか、多くの人が感じたことと思います。

学校が再開され、さらに通常に近い生活が行われるようになってきている昨今、このような特別な思いを持っている人は少ないでしょう。しかし、コロナが収まり、制約の少ない状態に戻っている今だからこそ、また、取り組むべき多くの課題に翻弄されている今だからこそ、私たちは足元をしっかりと見つめた教育活動を進めていかなければならないと考えます。大切なことは、日常の中にあらねばならないと思います。

日々の学校生活や授業に子供たちがどれだけ充実感や楽しさを感じているか。教員は、日々の活動にどれだけ達成感や喜びを感じながら業務に取り組むことができているか。すべての基盤がここにあると思います。充実した日々の活動の先に、教育目標の達成や大切な課題の克服が見えてくるのだと考えます。

編集後記

三河教育研究会定期総会・教育講演会講師くすのきしげのり様の著書「ぼくはなきました」（東洋館出版社）を購入し、拝読しました。

「じぶんのいいところがみつけられないそうたくん。ともだちのいいところはたくさんみつけられるのに。そうたくんはなきそうになります。そんなそうたくんのいいところをせんせいはみつけてくれました。それは、ともだちのいいところをたくさんみつけられることでした。」　※あとがき一部引用

本年度の三教研の各部会・委員会の研修会・研究会、並びに授業力養成講座を通して、教師の力量の向上が図られ、子どものいいところをたくさん見つけられる教師が増えていくことを期待してやみません。

ご多用の中、原稿をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。

表紙の写真

「運動会３・４年リズム『ＨＯＴ！ＨＡＴ！ＨＥＡＴ！』」

撮影　刈谷市立小垣江小学校　渡部　浩史 先生